



「気象大図鑑」

ストーム・ダンロップ 著
 乙須敏紀 訳, 山岸米二郎 監修
 産調出版, 2007年3月
 288頁, 定価7800円 (本体価格)
 ISBN978-4-88282-605-7

縦340 cm 横256 cm の大型の本である。見開きの写真は、横が50 cm になる。どっしりとした重さで、電車の中で読むというわけにはいかない。机の上に広げて、ゆっくり眺めるのに適した本である。「大図鑑」というだけあって、各ページはカラー写真が中心である。一見、子供向けの本ではないかと錯覚するが、そうではない。一般向けの気象の本である。しかし、このような写真集のような体裁で、気象を語ることができるのだろうか。それが、この本を手にとったときの第一印象であった。しかし、本書を読んでいるうちに、これは、非常にユニークな本ではないか、という思いがした。その最大の原因は、著者独特のセンスによる本書の構成であろう。全体は、以下の9章から構成されている。

- 第1章 雲起青天
- 第2章 驟雨の合間の陽光
- 第3章 視界をさえぎるものたち
- 第4章 氷の世界
- 第5章 気象警報
- 第6章 大気光学現象
- 第7章 全球観測
- 第8章 世界の気候
- 第9章 気候変動

この章立ては、普通の気象学の常識からみると、かなり独特である。第1章は、さまざまな雲が登場するから、雲図鑑のような感じになるのは予想できる。しかし、そこでも工夫がこらされており、単に、地表から撮影した雲だけでなく、有人宇宙船からの写真や衛

星画像も使われている。写真は世界各地から集められたもので、単に10種雲形を示すというだけではなく、ローカル色がよく出ている。第2章は、対流雲からの雨の写真が集められている。いわゆる「雨足」である。それだけでなく、露、霜などミクロな現象の写真もある。第3章は、霧、もや、黄砂など、視界を遮る現象を扱う。ここでも、地上の写真だけでなく、衛星画像がかなり使われている。第4章は、雪と氷に関するさまざまな写真が集められている。ミクロな現象から流水のようなマクロな現象まで、さまざまなスケールの現象が登場する。第5章は、雷、竜巻、台風など、激しい気象擾乱の写真が集められている。第6章はさまざまな気象光学現象を扱う。オーロラもこの章で扱われている。第7章は、グローバルな雲や風の分布を扱う。オゾンホールやエル・ニーニョ現象もこの章に含まれる。第8章は世界各地の気候の特徴を示す写真が集められている。第9章は、メタンの排出、氷河の後退、サンゴの白化現象など、環境変化に関わるさまざまな現象が紹介されている。

短い解説はついているが、基本的に写真集であるから、体系的に論じるという感じの内容ではない。著者の感性によって、かなり自由に写真を集めたという印象である。しかし、それによって、気象の新しい側面を見せられたという気がした。すなわち、気象学は、どちらかというところ、一般論を中心に組み立てられている学問である。それに対して、本書では、一般論よりは、気象のパラエティエーの広さが強調されている。分子スケールからグローバルまで、空間スケールのダイナミックレンジの広さもあるが、同じ地球上でも、局地性が非常に大きいことを感じさせる。著者は、地球環境に関して、かなり総括的な関心があるように見受けられた。世界各地から集められた美しい写真は、地球環境の多様性を語りかけている。

(放送大学 木村龍治)